

『あさぢが露』の主題について

—二位中将の物語から—

* 岩佐理恵

はじめに

『あさぢが露』は、物語前史において妃を盗み出すという事件を起こし、宮中の表側から姿を消した、源中将の一族、帥宮家の復興を描いたものではないか、という¹⁾ことを、拙稿において述べた。

前史に関する話題の語り方は「ナゾ解き式」²⁾であることが論じられてきたが、拙稿では、源中将の妹（物語の時代では行方不明）と現右大臣の子である三位中将を、『源氏物語』の薫を彷彿とさせるような人物とし、自らの母親の係累にまつわる過去を辿らせることによって、読者に前史を辿らせ、一方では、源中将の子である姫君を、三位中将と並び称される貴公子、二位中将の思い人として設定し、その姫君のルーツを辿らせる、というように、二つの別々の方向から辿らせ、最後に源中将の事件に行き着かせる、ということを描いた。

さらに、その一族の邂逅の感動を味わうことによって、帥宮家の子孫が、宮中の中心に返り咲くことに、読者が必然性を感じる仕組みになっている、帥宮家の復興を描く物語であると結論づけた。

辛島正雄氏は、本作品を、二位中将と姫君の「悲運の女性の物語」と、三位中将の「自己探索の物語」から展開する「出家得道の物語」とが、三位中将が姫君の保護者となることで、ひとつに合流したものと位置づけをして、

畢竟、この物語の主題性を支えるのは、帥宮家の人々であるというべく、その意味では、二位中将でさえ狂言まわしにすぎないともいえる。³⁾と述べた。しかし豊島秀範氏が、

ところで、辛島氏も危惧しているように、(三位中将)に焦点を絞るあまり、(二位中将)を「狂言まわし」と位置づけざるを得ない氏の視点では、物語前半の(悲運の女性の物語)を、後半の(出家得道の物語)に、どのように関連づけるかを説得するには充分ではないように思う。

と述べるように物語の前半部が、主題に対して、何の意味も持たないことになる。

物語の前半部分が、二位中将の女性遍歴に尽くされているにもかかわらず、物語後半部において、主題が帥宮一族の邂逅に集約されてしまうことについて、本稿では、二位中将の女性遍歴の位置づけについて述べ、そこから見える、本作品の主題と考えられる、帥宮家の復興が、どのようなものであるかについて論じたい。

〔本文引用は、福田百合子、鈴木一雄、伊藤博、石埜敬子『中世王朝物語全集1あきぎり 浅茅が露』(笠間書院、平成十一年十月)に拠る。〕

一、二位中将という貴公子と、その物語について

二位中将は物語の始発部において、三位中将と並び称される貴公子として、次のように紹介される。

殿の君達、左大将、大納言、春宮の大夫などあまた聞こゆるは、みな劣り腹にぞおはする。中将の君ぞ、北の方の御腹に、心もとなくおはせし、生まれ給ひて、思しよるこばせ給ふに、かひがひしく、何事もこの世にはあまりて見え給ふ。十五、六などによおはすらん。(178〜179)

冒頭の帝の過去をしのぶ場面が描かれた後、この現代の貴公子たちの紹介が始まる。すでに指摘されているように、『源氏物語』の「匂宮兵部卿」を模していると思われ、行方不明の母親を持つ三位中将に対して、二位中将は、出生に一点の曇りもない匂宮のような、一見陽気な色好みの貴公子として描かれる。しかし、二位中将は、幼なじみの、院の姫宮への恋に苦悩しており、一度は父関白の配慮により、結婚が叶いそうになるが、先坊の姫宮の母が亡くなり、代わりに姫宮の齋宮行きが決まって、失恋してしまう。この悲しみを慰めるために、二位中将は様々な女性のもとを訪れるようになる。

〔キーワード〕 あさぢが露／二位中将／源中将／帥宮家／女性遍歴

*平成十八年度生 国際日本学専攻

こうして、『狭衣物語』の源氏の宮の身代わり探しのように、二位中将を視点人物とした、院の姫宮の形代探しが始まる。この時点では、二位中将の心を慰める女性が見られるかどうか、物語の主題のように装われる。

その身代わりの一人として、本物語の主人公である姫君が登場する。主人公姫君と院の姫宮は、大納言典侍を母とする異父姉妹で、容姿も似ている。

目離れせずまぼり給へば、十五、六ばかりにやあらんとおぼゆる人の、限なき火影に隠れなく見ゆるに、まみ、額など、心に離るる時なき齋宮にぞ、ふとおぼえ給へる。(199)

始めは姫宮の身代わりに過ぎなかつた姫君であるが、行方不明となり、会えなくなつてから、二位中将は、次のように姫君を思うようになる。

はかなくて暮れぬる年を思し続けるに、かいばみせし方違への夜、思ひのほかなりし火影よりはじめ、はかなかりける契りのほどを思し続けるに、かく口惜しからぬあたりをのみおぼつかかなからず見尽くし給ふなかに、いとこれほどおぼゆることのかたきに、これしもかうおぼゆるも、口惜しかりける身の宿世かなと、つくづくとながめ給ひて。(254～255)

ここで、小島明子氏も指摘するように、多くの女性を見てきて、これほど心がひかれることはない、という二位中将の心情が描かれている。

主人公姫君の、物語における重要性は、二位中将の思いが身代わり以上のものに増幅される過程によって、次第に読者に認知されていく仕組みになつている。

それでは、院の姫宮以外の、他の身代わりの女性達はどうであろうか。『狭衣物語』の形代探しを模したければ、一人一人の女性達との関わりは、主題となる「帥宮家の復興」に意味を持たないことになる。他の女性達がどのように描かれているか、辿ってみよう。

二、二位中将の訪れる女性達

二位中将が、心を慰めるために訪れた女性は、先坊の姫宮、左大臣の姫君、姫君（主人公）、兵部卿の姉妹という順番になつている。この女性達と、主人公姫君との間に類似点、共通点が見られる事を指摘した上で、それにも関わらず存在する女性達と姫君との差異によって、二位中将の形代探しが、姫君の美質や幸運が強調されている文脈となつていることを論じたい。まずは先坊の姫宮である。

(1) 先坊の姫宮

二位中将の失恋の、原因となる人物である。姫君との類似点は次の二点である。①頼りにしていた人に襲われる。

数回の逢瀬ののち、二位中将は、先坊の姫宮を訪れなくなる。そして院の姫宮は、頼りにしていた叔父の律師に襲われるという目に遭う。これに対し、主人公の姫君も、二位中将が通つて来ない間に、幼い頃から父親代わりであった兵衛大夫に襲われそうになる。

②育ての親の成仏を気にする。

また、先坊の姫宮が、二位中将に見捨てられて自分の姿を亡き母がどのように思うだろうか、と成仏の妨げになることを案じている場面がある。

「色変はるものなれば、人はいづ方に見るらん。かの御ため暗き道の妨げにやなるらん。かかるものとてや、なべての人にはなびくまじく言ひおき給ひしに、違ひぬるは心づからぞかし。形見の色をだに改めで、かかる色を添へつる、亡き魂もいかが見給ふらん。」(193)

姫君も同様に、兵衛大夫のもとから逃げた後、母代わりの乳母の死後を案じている。

乳母の、わが行方かなしき道にもまよふらんと思ひやられ給へば、(略) (229)

このように、一つの物語中で、皇族の血を引いた二人の女性（地位は異なるが）に、類似した出来事が起こり、共通した反応が描かれるというのは、二人を読者に比較させる意図があると思われる。

先坊の姫宮は、襲われたところを恋人の二位中将に目撃され、自責の念から病んで死亡するのに対し、主人公姫君は襲われたときに気絶して難を逃れ、女房たちの助けによって、西の京に身を隠す。境遇と、途中までの出来事は類似しているが、主人公姫君は姫宮と同じ結末を辿らない。これは、姫君の方が、運にも周囲の女房にも恵まれていることを示すものといえよう。次は左大臣の姫君である。

(2) 左大臣の姫君

二位の中將が、父の勧めに従つて結婚した女性であるが、院の姫宮を忘れられず、夜離れする。姫君との共通点は次の二点である。

①夜離れされる

主人公姫君も夜離れされるが、兵衛大夫の邪魔が入ったことが理由（姫君は知らない）であり、姫君自身に非はない。

②二位中将の子供を産む。

両者はともに、二位中将の子を産む。

(a)今より山口しるきうつくしさに、中納言殿の私の若君のあはれき、行方なき形見に思ひて、常に通ひ見給ふに、今はやうやう見知りきこえ給ひて、這ひかかり、むつれなどし給ふに、(b)あはれ尽きせぬ御心中なり。(261)

右の引用は、大君が男の子を出産したときの描写であるが、大君の子は、姫君の子を思い出す契機となっているのに対し(傍線(a))、既に引き取っていた行方不明の姫君の子が、姫君に思いを募らせるよすがになっている(傍線(b))、という点に、左大臣の大君もまた、主人公姫君への思いの強さを読み取るための比較対象と位置づけができる。最後に兵部卿姉妹である。

(3) 兵部卿姉妹

この姉妹の挿話は人の笑いを誘う烏滸物語として登場している。①②の共通点は次の二点である。

①祖父は親王だが、父親の過去の所業により、世間から忘れられた存在

「これは、早う失せ給ひにし中務の宮の家に侍り。その御子に、兵部卿と申して、世の痴れ者にておはせしも失せ給ひし。今は、いかがなりて侍るらん。その親族などやおはすらん」(232)

家族構成と父親の過去の所業が、姫君と重なるが、姫君のように貴公子に見出され、世間に顧みられる兆候はない。このことは、皇族という高貴な血筋だけでは説明できない、姫君がもつ帥宮家固有の美質を証明しているといえよう。

②女房として出仕する話が出る

この姉妹の女房は、母君が亡き後の先々の不安を打開するために中君の出仕を勧めている。

「まことに、かひなき御蔭に隠れてこそかくてもおはしませ、誰もいかがさせ給はん。誰も、やすき方どもにとまかくも見おき給ふこともなくて。中宮にこそ上臈求めさせ給ふなれ。御匣殿の失せ給ひたんなるに、参らせ奉り給へかし」(233)

しかし、大君は、母君が生きているうちは傍にお仕えすると宣言し、それを断る。これに対し、姫君にもまた、左大臣家へ出仕する話が出ていたが、乳母の判断で断られていたことが、父代わりの兵衛大夫の言葉から発覚している。

次には、御婿取りの時、なにがしが娘と聞き給ひて、召しありしに、受け引き給

はざりしかば、たびたび否び申してやみにしを、(略)(209)。

姉妹が女房によって出仕を勧められているのに対し、主人公姫君は、母代わりの乳母によって断られている。また、この乳母は、子供達に次のような遺言を残す。

子ども、兵衛の大夫にも男子一人、十二、三ばかりなるあり。これらをも同じく据ゑて、「我を親と思ひて孝養の心あらん者は、姫宮の宮仕へを仕うまつれ」など、ただこの御事よりほかに言ひ置かず、いくほどの日数も悩まず、二月一日はかなくなりぬ。(216)

姫君の乳母は、自らや家族の生活を守るために姫君に仕えるのではなく、姫君の将来を一切の妥協を許さず、自分や家族の一生の全てをかけて守ろうとしていることが分かる。世話をする女房達が、家族以上の絆、忠誠心を見せているところにも、姫君の美質が読み取れる。この女房の姿は、後半に登場する、都を離れた元女房たちの、帥宮家をしのぶ姿とも重なるものがある。

このように、二位中将の女性遍歴は、主人公姫君と、境遇や出来事に共通点を持つた他家の姫君たちとの、圧倒的な差異を見せつける文脈となっていることがいえる。その差異は、姫君が、運や美質に恵まれ、女房達から、主従関係以上の慈しみをもつて接されていることから生まれたものだということが言えよう。

つまり、二位中将の遍歴は、彼の姫君への愛情が深まっていく様を描く文脈であると同時に、帥宮家の姫君の美質を裏付ける文脈であるといえる。

さて、主人公姫君と他の一族の姫君達との差を見せつける文脈は、二位中将の女性関係の描写において見られるが、他家との差を強調する文脈は、父の源中将についても見られる。彼と差異が見られる人物は、兵衛大夫である。兵衛大夫の過去の様子については、物語内で次のように語られる。

この兵衛大夫は、(a)若かりし時より行方なく心好きて言はれし者の、さやうの方の痴れがましさに、蔵人も放たれて、あさましく身貧しくて過ぎけるに、この妻は、世のわたらひ心もとなからで過ぎけるに、式部の大夫失せて後、いま七、八年が姉なれども、語らひつきて後は、世にも交じらひ、人々しくて過ぎけるに、例の好きなどもせさせず、(略)念し過ぐすに、この姫君やうやうおよすけ給ふままに、もとの好き心つつみあふまじくおぼえけれど、十ばかりになり給ひしより、乳母も見せきこえず、疎くのみもてなしたるに、うち捨てきこえて、失せぬる後は、何にはばかるべきにぞと、乱れ寄りけるを、憂きことに思ひとりて、消え失せ給ひぬるを、やがて思ひとり、幼き子どもの行方も知らず、つひに法師に

なりて、行ひ歩きけるを、「(b)妻に遅れてかくなりぬるぞ」と、人は言ひけり。(270
〜271)

かつて好き者と呼ばれ、官職を奪われていたところに姫君の乳母と出会い、真つ当な人生を歩んだが、乳母の死後、姫君を襲ってしまう。その結果、姫君を失い、子供のことにも顧みず、出家した。

女性関係が理由となって官職を奪われ、またその後、愛する女性を失ったことが原因となって出家する、という点が、源中将の前史に部分的に重なっている。

源中将の事件については、当時の周辺の人々は「あはれ」と言い、被害者の帝までも、「人をも身をもいたづらになししぞかし」(176)と源中将の身をも惜しむ言葉を発しているのに対し、兵衛大夫の過去については、傍線部(a)のように、「痴れがましさ」の語り手の一言で片付けられる。行為は類似していても扱い方が決定的に異なる。

これと同様のことは、兵部卿と源中将との比較においても言え、源中将の、帝の妻を盗んだ行為は、「痴れ者」という評価も妥当であるが、登場人物に「あはれ」と語り継がれ、その所業から生まれた姫君が、語り手に貶められることもない。

さらに、兵衛大夫の出家について、人々は、傍線部(b)のように、「妻に先立たれたから出家してしまった」と推測している。この推測は、源中将が、大納言典侍に先立たれて出家した前史と重なるが、兵衛大夫の方は、姫君を襲い、行方不明にしたことが真の原因であり、実情とのずれを知る読者からすれば、邪まな男の後日譚を、余計に滑稽に見せる語り手の皮肉としかなりえない。

このように、他の一族との類似した出来事において、扱いや内実に差異を持たせることで、帥宮家の運のよさや、美質を強調する文脈が随所にちりばめられている。

つまり、一見、帥宮家に無関係に思える挿話にも、帥宮家の比較対象として、帥宮家の素晴らしさを強調し、復興の必然性を証明するような役割が付されているということがいえよう。そして、特に二位中将の形代探しには、その働きが顕著に見られるのである。

三、帥宮家の復興から見た二位中将という存在

ここまで述べてきたように、帥宮家に一見無関係である二位中将の辿る物語が、帥宮家の美質を強調し、復興を合理化するものであるとするならば、二位中将は、帥宮家を引き立てるための、「狂言まわし」といえよう。彼は形代探しの主題を担う主人

公のように見せかけて、引き立て役に過ぎなかったということである。

では、物語内部において、主人公姫君と男女の関わりを持つ、二位中将という人物は、「帥宮家の復興」という目的から見た場合、どのような存在なのであろうか。

そもそも、帥宮家の復興は、この一族の末裔である三位中将、姫君によって、積極的に行われているものではないということを前稿で述べた。この復興は、お告げや父母の導きといった、見えない存在、あるいは神仏が力を及ぼして行っているかのよう描かれている。つまり、復興を望んでいる帥宮家の人物は、現存部分で一度も登場しない。

しかし、前史における中心人物、源中将らしき人物が、物語世界に何らかの影響を及ぼしていることが、姫君が仮死状態になり、山にうち捨てられた際、源中将が北山の聖に夢告で救済を求めたと、北山の聖によって語られる部分で明らかとなる。

去年の十月にまかりのぼりて候ひし十八日夜の夢に、かの書写におはします聖の、『年頃持ちける火取る玉を、よしなき人の取りて失ひてんとする。必ず必ず取り返し給へ。この暁取り給ふべき』とのたまふに、『いづくをはかりにてか、

たづね候ふべき』と申すに、『あは、あれなり』と北を指し給ふ。見やれば、野の中に、天人のやうなる女房、玉を手に持ちて侍りて見て、覚めぬ。(381)

この夢告によって、北山の聖は、仮死状態だった姫君を救うことが出来た。さて、この傍線部の源中将の言葉で、「火取る玉」とは、姫君のことであろう。「よしなき人」というのは、ここでは、姫君をこのような状況に追い込んだ人物として、兵衛大夫とも二位中将とも取ることが可能である。十年以上、見捨てていたにもかかわらず、源中将にとって、姫君が「年頃持ちける」、そして「取り返」すべき存在であったということは異様に感じられるが、源中将の意識の中では、娘は掌中にあり、その将来も、相応しい人とともに、自分が敷いたレールを歩ませることが前提になっているときえ思われてくる。

つまり、帥宮家にとって、他の一族の誰かが、「よしなき人」であるかどうかは、源中将、あるいはそれを加護する神仏の判断によるものであることを意味する。では、二位中将は「よしなき人」なのであろうか。

この夢の後半部において、姫君と思われる、「天人のやうなる女房」が出てくるが、その点が類似している夢を二位中将も見ている。

夜もすがらうち行ひて、「いづ方にありとも聞かせ給へ」と祈りて、暁方につゆばかりまどろみ給へるに、いとうつくしき女房の、

巡りあはんほどぞ苦しき結び置くこのよは深き契りなれども

と言ふを、この人かと思ひて、近く寄らんとするほどに、後夜の行ひのほどに、おどろき給ひぬ。(226)

この夢は、姫君の想いが二位中将に見せた夢ともとらえられるが、「巡りあはんほどぞ苦しき」について、二位中将に再会することが、姫君にとつて後ろめたい理由は見つからないことを考えると、神仏のような存在である源中将が、二位中将に「姫君とお前の縁は終わつた」と告げ、子供の存在を知らせるためだけに、一方的に見せた夢であるとも考えられてくるのである。

この夢告の通り、現存部分において、二位中将は姫君との再会を果たしていない。『風葉和歌集』の示す最終官位において、二位中将が「入道関白」、姫君が「尚侍」と表記されていることから、二人が再会し、添い遂げるといふ展開は考えにくい。

一方で、この夢がきっかけとなって、二位中将は、さらに姫君への思いをつのらせ、三位中将よりも先に、姫君の素性にたどり着き、三位中将を、帥宮家の過去を知る女房達に出会わせるといふ役目も担っている。

つまり、二位中将は、この物語の中で、兵衛大夫の娘として暮らしていた姫君を見出し、三位中将と姫君を帥宮家の末裔として巡り合わせるきっかけとなるなど、物語内部において、帥宮家の復興に必要不可欠な人物でもあるといふことがいえる。

しかもそれは、後半に進み、源中将の存在が浮き彫りになるにつれて、源中将によつて仕向けられたかのようにも取れるのである。二位中将は、源中将によつて、姫君と一生を添い遂げる人物としては扱われず、帥宮家の一員ではないにもかかわらず、復興に向けての踏み台として利用された、ピエロのような人物であるといえよう。

しかし、先ほども述べたように、この帥宮家の復興は、三位中将、姫君という子孫によつて積極的に行われているものではなく、むしろ血筋のつながり、源中将や仏神の導きによつて、彼らが翻弄されて行われているものである。そう考えると、他の二人もまた、単なる復興の道具立てに過ぎず、二位中将と同等の操り人形なのである。

第二節において、二位中将の形代探しの物語が、構造上、姫君を引き立て、帥宮家の優越性を読者に納得させる役割を担っていると述べたが、単に読者を誘導するための仕掛けというにとどまらず、物語内部の論理の次元においても、主人公姫君と関わりを持つとする二位中将の行動そのものが、姫君達を帥宮一族の復興に誘っている。そして、後半に、源中将の存在が浮き彫りになるにつれ、二位中将の行動そのものが、物語内の源中将に導かれてのものであつたかのように印象づけられていくので

ある。その行為は、無意識のうちに、無償で行われている。二位中将もまた、源中将に操られている人物の一人なのである。

四、源中将という存在

ここまでを見てみると、姿を現さずに、全てを操る存在としての源中将が浮かび上がってきた。『苔の衣』においても、娘のピンチに駆けつける父親は出てくるが、源中将は、自家の子女だけでなく、他家の貴公子や法師まで、姿を現すことなく干渉し、操るといふ、特異な存在といえる。

源中将の若き日々について、他家の人物との比較に見られる優越性を指摘したが、特に、皇族の血を引く者同士である兵部卿との比較において、「源中将」と臣下につつたことを表す姓を付して呼ばれる彼が、物語前史における中心人物で、類まれな存在であることは、意味があると考えられる。

やはり、「妃との密通事件を起こした源氏」として、『源氏物語』の光源氏に重ねられているのである。光源氏の臘月夜との密通も、世間に知られ、光源氏は、しばらくの間官職を奪われ、須磨という土地に放浪していた。

『源氏物語』の光源氏は、ありとあらゆる美質を兼ね備えた天皇の子でありながら、臣下につつたために、様々な困難に出会い、それを自らの美質や、政治能力によつて乗り越え、宮中で活躍する人物として描かれている。一歩間違えば帝になつていたかもしれない、潜在的には帝の妻を過つ恋敵に相応しい存在といえよう。

本物語における前史での源中将もまた、当代を代表する貴公子でありながら、恋のために一生を無駄にしてしまった、と十年失踪したままでも語り継がれていることから、親王の子に過ぎないが、「光源氏」になりうるような人物であつたと思われる。

ただ、『源氏物語』の光源氏は、須磨に流された際、その地で、中宮となる女子を産む女性を得たり、「絵合」巻で活躍する絵日記をしたためたりした後、他家を圧倒するような貴族となるべく帰還し、政治家として、栄華を極める。

一方、源中将もまた、宮中を出奔し、遠方の地で成長するが、全く異なる次元の方法によつて帰還する。十年の歳月をかけて、神仏の力を持つような存在となり、都を遠隔操作し、物語世界に少しだけ姿をのぞかせるだけの帰還であり、都に政治家として復帰することはないのである。

「この聖はなん、生身の仏と見奉り侍る。夷が荘にて行ひ給ひて、あひ奉りてよ

り、一時も□□奉らず。妙にめでたきことのみあらはし給ふ。法華経修し給ふ声は、迦陵頻もかくやとぞおぼえ給ふ。静かなる夜などは、普賢菩薩必ずあらはれ給ふ。知恵才覚のすぐれ給へれば、齢はるかに劣り給へれど、彼を師と頼み奉りて、ものの絵、文はしも、習ひあかし侍る。その昔は、白黒しも見侍らざりき。唐土へも具して渡り給ひしかば、かの国の人々は、惜しみ奉りし。みめ容顔□、いみじくおはしましける人にやとおぼえ給ふ。かくて侍れども、御前所はいかなる人にておはしけると、え知り奉らず侍り。二十八にて出家し給へるとばかりはうけたまはり侍り。ただ人にはおはせざる。□□のままに、都へ向かじと思ひ給ひてける」(279～280)

右は、北山の聖に語られた現在の源中将の姿であるが、もはや、貴族としての面影はなく、「生身の仏」という、ほぼ仏と化した、人間離れた存在となっており、唐土においてもそのカリスマ性は通用している。そこまでの力を得ながら、「都には行かない」と言っている。つまり、帰還しない「源氏」なのである。

さらに、この『あさちが露』では、もう一つの異なる天皇の子孫、源氏の姿として北山の聖が描かれている。

なにがし、昔、形のごとくも弓箭の道にたづさはりて侍りしかば、遊び戯れの道にも、獸を狩り、鷹を使ひ、犬兔などを射るをや□にて、山中に日を暮らし、夜を明かし侍りき。仏道とは何を言ひ、道心とはいかなること知らざり□。しかれども、期来たり侍れば、三□になりし年の春、親にて侍りし者は、源のなにがしと申しし、内裏の大番の時、指されて参り侍りしに、母に侍る者仁和寺に侍るもとに、晝まかり侍るに、敵待ち受けて、内野にて討たれ候ひにき。こなたかなた五十余人ばかり候ひしが、さながら手負ひ、死に侍りて、なにがしも、わづかに命ばかりは生きて侍りしかども、ほのぼのと明くるほどに、内野に、父をはじめとして、三十余人の者切りふせられて侍りしに、たちまちにかかる心おこりて候ひけり。(277～278)

この『あさちが露』が書かれた時代を考えると、同じく天皇の子孫でありながら、武力という、貴族とは異なる方法で、天下を治めようとする「源氏」が登場し、貴族社会をも、おびやかしつつある時代である。その一端として、武士として活躍する源氏の姿がここで描かれている。この武士の道は、北山の聖にとつて、背くべき空しい道として描かれている。北山の聖が、年下の源中将を「生身の仏」と賞賛し、師と仰いでいるこの様子は、源中将が、狭い貴族社会のみならず、都の外のあらゆる世

界、唐土の人々や武士をも魅了し、網羅するような存在として、物語世界に君臨する超越した存在であることを物語っているのではなからうか。

まとめると、物語前史に活躍した源中将は、禁忌を犯した人物でありながら、その存在感は、『源氏物語』の光源氏の死後を描く、「匂兵部卿」以降における光源氏と同等とも言える。しかし、若き日の光源氏が、密通による流離の後、自ら返り咲き、宮中での栄華を極めたのに対し、『あさちが露』の源中将は、出奔したまま、表舞台から遠ざかり、神仏に近い方法で、世の中全体を操り、自らの子孫に宮中での栄華を極めさせようとしているかのような描かれ方をしている。

そもそも、源中将の目的とは何であろうか。先ほど挙げた、源中将の言葉に、「火取る玉」と出てきたように、姫君こそが、源中将にとつて大切な宝なのであり、彼の真の目的は、娘を、彼の思う「幸福」に導くことであろう。そのために、持てる力をあます所なく使っている。これは、神田龍身氏が、述べている通りである。

確かに二位中将や三位中将が担っている主題が一方にあるのであって、一筋縄にはいかなないのであるが、物語の骨格は、親を失ったと思われた女主人公が父の助けで尚侍にまで到る物語として読めるはずのものである。

宮中で「尚侍」というしかるべき地位を得て、姫君の美質を、かつての源中将がしたように、宮中に轟かせ、甥である三位中将にその後見をさせるのが、彼の考える姫君の「幸福」なのであろう。

しかし、その父源中将の思いが、神仏からの加護も手伝って、三位中将の望む出家や、姫君自身が望んでいる暮らしを断念させていることは見逃せない。

三位中将が出家をすることは魔縁につながる、と北山の聖が述べていると前稿で述べたが、三位中将に引き取られることが決まり、世間に知られることを恐れる姫君に対して、聖の母が次のように言っている。

「略」今日明日知らぬ身に、かくて見置き奉らば、よしなく、黄泉の妨げともなり給ひなんと思ひ給へて、極楽の願ひに添へて祈り申しつることに侍り。縁なきことを強ひてし給へれば、魔縁出でて、よからぬこと侍るべし」(287)

あくまでも、彼らの辿られる道は、源中将の考える姫君の「幸福」に通じるものであり、それが、結果的に「師宮家の復興」に向かう形となったのであろう。そして、神仏もそれを加護しており、それ以外の道をたどることは許してはいない。

そもそも、前史についても、源中将が盗み出した大納言典侍が、源中将と暮らすことを望んでいたかということは問題にされていない。彼の密通は、帝によって罰され

たが、物語では、肯定され美化され描かれている。そして、都を出奔し、神仏の力を得た現在の源中将は、誰にも罰することが出来ない、絶対的な存在である。その彼が願う、姫君の「幸福」、そして彼の光を受け継ぐ帥宮家が復興するということのためには、神仏も助力を惜しまない。このことが、冒頭の帝の讓位から始まる、神仏に加護される帥宮家の復興の物語の基底となっているのではなからうか。

現存部分末尾において、三位中将が、主人公姫君を中宮の姫宮の傍に置くために自邸に迎えようとしていることから、源中将がこれ以上手を出さなくても、三位中将の後見によって、姫君は、宮中に迎えられ「尚侍」となる道筋が立っているように思われる。現存部分で、源中将のなすべきことは、すでに終わっているのではなからうか。源中将に面会したいと、三位中将が北山の聖に申し出ていることから、散逸部分に、二人の対面場面が描かれたかもしれないが、北山の聖の言によると、源中将は、一度、病で命を落としそうになっており(276)、都には姿を現さないまま、圧倒的な存在感をもって、物語世界から再び姿を消したのかもしれない。

まとめ

『あさちが露』の二位中将の形代探しの物語は、姫君の優越性を描く文脈としてとらえることが可能である。他の一族の姫君達が、夜離れされたり、死亡したりする一方で、二位中将の想い人として生き残る姫君を描くことで、姫君の美質が強調され、帥宮家の復興の必然性が強まるのである。

この作品の主題とされる帥宮家の復興にとつて、二位中将は一見、関係のない人物であるが、彼は姫君と関わるることによって帥宮家の復興に重要な役割を果たしている。この帥宮家の復興が、末裔の三位中将、姫君の意思とは関係なく、神仏や、源中将の意思によって行われていることを考えると、二位中将もまた、姫君、三位中将と同様に、無意識に翻弄される人物の一人なのである。

さて、このように、物語世界の登場人物を翻弄する、影の主人公ともいえる源中将は、姿を現すことなく全てを把握し、世の中を支配している。それも、貴族としての政治能力ではなく、神仏の力を借りて世の中を動かしている。このことを、作中の登場人物は認識しておらず、読者にだけ、そのようにも解釈ができるような書き方がされているのみである。つまり、登場人物達にとつては神同然の存在である。

作品の最後が散逸していることが惜しまれるが、『風葉和歌集』に残された姫君の

最終官位、「尚侍」という状態は、源中将の望んだことなのであろう。
『あさちが露』とは、物語前史において宮中を去った一族の、没落の原因の張本人である貴公子が、神仏の力、加護を得て、娘を導き、結果的に自家を蘇らせたという復興の物語と位置づけられるのである。

注

- (1) 『あさちが露考』—帥宮家の子供たちについて—(『平安朝文学研究』平成二十二年三月)。
- (2) 大槻修「末巻散開部分の復原(その一)」(『あさちが露の研究』桜楓社、昭和四九年六月)。
- (3) 『浅茅が露』管見—主題性と物語史的位置—(『国語と国文学』昭和六一年四月)、『中世王朝物語史論下』笠間書院、平成十三年九月)。
- (4) 『浅茅が露』論—主題を求めて—(『弘学大語文』平成元年三月)、『物語史研究』おうふう、平成六年五月)。
- (5) 安永悦子「あさちが露」の独自性について—(『平安文学研究』昭和三三年六月)、大槻氏前掲書籍(2)所収「登場人物について」。
- (6) 『浅茅が露』散逸部の推定—(『国語国文』平成一三年七月)。
- (7) 石壁敬子「あさちが露」の構造—重層する物語世界—(『論集日記文学の地平』新典社、平成十二年三月)。
- (8) 乳母との心の交流については、豊島氏が前掲論文(4)で指摘している。
- (9) 大槻氏は、この二人の聖を、王朝物語的な、三位中将の観念的な発心と異なる「新しい」出家・遁世の姿」として評価している。(前掲書籍(2)所収「主題」)
- (10) 「仮装することの快楽、もしくは父子の物語—鎌倉時代物語論—」(『日本文学』昭和六一年十二月)、『物語文学、その解体—『源氏物語』「宇治十帖」以降—』有精堂、平成四年九月)。
また、源中将の救済行為について、大槻氏は「娘に対する父性愛が、仏教的な霊験を伴ってみごとに実った」(前掲書籍(2)補注5頁)ものとし、豊島氏(前掲論文(4))は、「親子の恩愛」という観点から、世俗と断絶した「高德の聖」でありながらも、「救済せざるを得ない」(書写の聖の心中)を読むべきである」としている。
- (11) 左の記述から、姫君の誕生は、大納言典侍の意思を無視した、源中将の一方的な態度の結果とも考えられる。
籠りおはして、もろともに過ぐし給ひしを、女房は、朝夕に音をのみ泣きて思し嘆きしか

岩佐 『あさちが露』の主題について

ども、御契りや深かりけん、ほどなくはらみ給ひて、(29)
(12) 辛島氏前掲論文(3)

The Theme of “ASADI-GA-TUYU”

— Linking the Story of NII-NO-CHUJO —

IWASA Rie

abstract

The context in this story that NII-NO-CHUJO looks for the substitute steady for his first lover appears to be far from the theme of the story, proposed by the author of this report, “the revival of the SOCHI-NO-MIYA family.”

This report proposes to bring to light how NII-NO-CHUJO’s love affair highlights the superiority of GEN-NO-CHUJO’s daughter, a descendant of the SOCHI-NO-MIYA family, by comparing her with other girlfriends, and demonstrates that his association with her is of great importance to the SOCHI-NO-MIYA family. This study proves more clearly that the theme of the story is “the revival of the SOCHI-NO-MIYA family.”

In addition, this report shows that the main characters are managed and manipulated by GEN-NO-CHUJO who is told that he had flourished before the age of the story, and proposes that the revival of the family seems to have been orchestrated by GEN-NO-CHUJO behind the scenes, in pursuit of the happiness and glory of his daughter.

Keywords; ASADI-GA-TUYU, NII-NO-CHUJO, GEN-NO-CHUJO, SOCHI-NO-MIYA family, love affairs